

【平成23年 7月 広域緊急援助隊交通部隊 男性警察官（35歳）】

「被災者のことばから誇りと使命感を学ぶ」



東日本大震災の発生に伴い、広域緊急援助隊として、3回の派遣を経験させてもらったが、一番印象深かったのは、初めての派遣で向かった第4次広域緊急援助隊での活動である。

第4次広域緊急援助隊では、最初に多賀城市内の信号滅灯交差点での交通整理にあたったが、同交差点付近には大型店舗が建ち並んでおり、震災直後からそれらの店舗からの盗難が絶えないと地元の方が話していた。

当然、その話を聞いた私はこんな混乱に乗じて泥棒を働くななんて許せないという気持ちであったが、地元住民の一人は「泥棒は悪い。絶対に自分はそんなことはしないが、泥棒をしてしまう人の気持ちも十分に分かる。こんな状況に置かれ、物資も何もない状態であれば、盗みを働きたくなる気持ちが起きないわけではない。それが生きていくためであればなおさらだ。」と話していた。

罪は罪であるが、生きていくためにどうしても罪を犯さなければならない、それほどの状況に置かれているんだということを実感させられ、実際に被災した者とそうでない者の考え方、ものの捉え方の違いを教えられた。

また、その方はこうも話していた。「警察官は我々にとってのスーパーマンだ。何かをして欲しいというよりも、何かあっても必ずどうにかしてくれるという期待感がある。そこに警察官がいてくれるというだけで安心感がある。わざわざこんな遠くまで応援に駆けつけてくれてありがとう」と。

そんなことを言われ、使命感に燃えない警察官がいるだろうか。自分は警察官を拝命して以来、こんなに住民のために何かしたいと思ったことはなく、逆に自分が誇りと使命感の大切さを学ぶ結果となった。

今回の経験は間違いなく自分の警察人生の糧となるだろう。そして不謹慎ではあるが、こんなにも貴重な経験をさせてもらえたこと、そしてそこで出会ったあの地元住民に感謝したい。